

## 北川正恭さん講演会「我々のまちは我々の手で」講演要旨

平成25年9月29日(日)午後2時

小千谷市民会館大ホール



私の提唱した「マニフェスト」は2003年に流行語大賞となった。有権者と政治家が契約し、できた理由、できない理由をちゃんと説明する、それを違えれば政治家が信頼されない。

近年は「北京の蝶々」という言葉を提唱している。北京で1羽の蝶がはばたくとそれを見た周りの蝶もはばたき出し、最後にはハリケーンが起こるといふ、一つの行動が大きなエネルギーに繋がる例えである。誰かではなく自分がやることで、共鳴してすごい力になる。ここにいる皆さんが、この講演の帰りに小千谷の蝶々になってくれたら、こんなにうれしいことはない。

今まで政治とは中央集権であると刷り込まれ、東京に人とお金が集まるような国づくりをしてきた。廃藩置県によって大革命を行った明治、東京の人口は96万人、新潟は156万人と多かった。しかし中央集権によって人とお金が集まった結果、東京は1,300万人を超え、新潟は200万人。結局は東京が独り勝ちをするようになっていく。

1995年に三重県知事になった。権力は国にあるから、頭を下げて回った。当時は陳情や接待のために裏金を作るのが慣例化していたが、その年の9月にカラ出張による裏金が発覚した。職員と皆で腹をくくって公表した。管理職で弁償し、処分を受け、再発防止のため条例を整備して、この不祥事をきっかけに三重県庁の変革ができた。これからは、東京に陳情に行くやり方を考え直して、自分たちで考えて自分たちで責任を持って解決していくという立ち位置に変えていかないと小千谷に明日はない。このことを市民の皆さんが市長や市役所や議員と一緒に、真剣に我がこととして考えていただきたい。この決意ができた地域が勝ち残っていく。

近年、徳島県上勝町が映画やテレビ番組に取り上げられている。かつて林業で栄えた人口1,800人の小さな町。民間出身の農協職員が特産になる物を探していたところ、料理の付け合せの葉っぱを持ち帰る人を見た。そこにビジネスが始まった。葉っぱがお金になるなんて考えつかなかったし、なかなか相手にしてもらえなかったが、地元の高齢者が手伝ってくれた。ゴミだった葉っぱがお金に代わり、年収1,000万円を超える高齢者が現れるようになった。役場も負けていられないとゴミゼロ運動を本気でやった。その結果、ゴミが80%少なくなり、ゴミ収集車や焼却炉が不要になって行政コストが減った。今まで使っていたお金を減らせたことで可処分所得が増えた。やればできる。今までのように役所に頼っていたらダメ。役所は商売下手に決まっている。本気で社会的コストが減るような方法をみんなで考えよう。

このように、皆さんと市役所が組んで小千谷が自治のまちになれば日本は変わる。市民も市長も職員も議員も一緒になって考えていく小千谷市を作っていかなければならない。民主主義であるならば、市民の側も権利を主張するだけでなく、同時に義務も果たしていった方がお得ですよ、という時代になった。市民がそういう意識を持ったら必ず小千谷は変わる。

変わることができなかった典型的な例が北海道の夕張市。かつて石炭で栄えたが、分権時代になり自治体の財政が苦しくても国がお金を出してくれなくなった結果、レッドカードを出されてしまった。今、住民は悲惨な状況になっている。今のうちに、将来の子供や孫のために、ぜひ真剣に考えてほしい。市町村合併が盛んな時期、小千谷市は合併しなかった。ならば、決意するしかないのでは。

岩手県葛巻町では、牛舎に国の補助金をもらおうとしたら条件が厳しかった。考えた結果、補助金に頼らず自分たちで建て、予算が1/5になって、そのお金を他に回せた。自分たちで創意工夫し、風力発電や太陽光発電、バイオマスによるエネルギー生産をおこなって、エネルギー自給率 270%になった。お荷物だった風や家畜の糞尿を宝物に変えた。そういった知恵が行き渡ったときに、自慢できる誇りを持つことができる。小千谷にはこういうものがあるんだ、東京とは違うんだ！という誇りを持てる状況を作れば必ず変わっていく。

この講座をきっかけに、1年経ったら小千谷が変わったな、市役所職員と市民が力を合わせたら38,000人の蝶に変わった、となってほしい。この講演で「そうだよな」と思う部分があれば、ぜひ市長や市職員と一緒に話し合い、言うべきは言い、協力すべきは協力し、我々のまちは我々でつくるという状況になれば小千谷市が変わるはず。

マニフェストは選挙が終わった後、検証することをいう。市政が市民の協力のもとに行われるようになれば、緊張感が変わる。市民みんなでよし！と言えるような小千谷市を作っていってほしい。

文責 小千谷市企画政策課